



▲訓練の様子

▶消防や警察も見守る



宮澤医師

安心して迷えるまちめざし

神奈川・汐田総合病院

地域住民と事業所共同で認知症訓練

認知症の人をどうささえるかは、地域の大きな課題です。神奈川・汐田総合病院では、近隣の医療・介護・福祉の事業所と「川のまちエリア」を立ち上げ、住民とともに地域の課題を考えています。昨年十一月には、初めての「認知症SOSネットワーク模範訓練」にとりくみました。(丸山聡子記者)

「認知症 模範訓練」のノボリに、オレンジのヒップスを着たグループ。川の土手で空の釣り具入れを持って立ち尽くしている男性に声をかけました。

「お出かけですか?」「釣りに来たんだけど、釣り竿がなく...」「お困りですね」「大丈夫、大丈夫!」離れた場所では、別のメンバーが「道に迷った男性がいます。認知症のようで!」と電話で通報しています。

今年「迷っても安心してまちづくり」をテーマに訓練を計画。地域で迷っている「認知症」役の人に声をかけ、保護し、通報するまでを行います。同会議メンバーはサポート役で、認知症役や捜索隊は町内会や民生委員たち。消防や警察、区役所からの参加もあり、総勢約一〇〇人での訓練です。

五つのグループが川の土手と公園の二カ所に分かれ、認知症と思われる人を探します。あるグループは、一人でいる高齢男性に気づきながら、「外見は普通だし、おかしい言動も



訓練後、気づいたことを話し合う

「訓練後、気づいたことを話し合う」の「声」。

認知症サポート医でもある同院の宮澤由美医師は、「訓練時の気持ちや日常での経験の共有が大事。認知症の人が安心して暮らすには、誰もが安心して暮らすまち、どんなまちにしたいか考えていきたい」とまとめました。

■補い合い、ささえ合う

後日、「川のまちエリア会議」メンバーで振り返りを行いました。地域の人たちが楽しそうに参加していたことや、「やって良かった」にとどまらずに反省点や提案が積極的に出されたことに、「訓練を重ねれば、安心して迷えるまちづくりにつながるのではと希望を持った」などの意見も。また、地域包括支援センターが行う認知症サポート養成講座で「訓練のDVDを上映してほしい」と、次につながる報告もありました。

「安心して迷えるまちめざし」と素通り。しばらくして戻っても同じ場所にまだ男性がいたので、声をかけました。ベンチに一人で座る男性に声をかけて話し込んだものの、たまたま公園にいた一般人だった...というハプニングも。

■認知症の人の気持ち

病院に戻り、訓練の振り返り。訓練の様子を撮った動画の一部を視聴した後、グループごとに意見を話し合いました。

「本人の隣で通報の電話をしていた。不安をおおってしまっ

し座ってお話ししませんか」と声をかけるなど協力できて良かったとの感想も出ました。実際にやってみただけで具体的な心配も出てきました。「一人でいる時、認知症の人を見守りながら通報するのは現実的に無理」「訓練で通報したら、〇分ほどで現場に向かいます」と言われたけれど、見知らぬ認知症の方を相手に、その時間を乗り切れるか」などです。

「認知症」役は町内会の男性役員さんらが引き受けました。訓練でも大勢に囲まれると恐怖感がある、目の前で通報されると悪いことをしたように感じた、まねなかつたなどの意見が出された一方、「優しく声をかけてもらえると安心できた。経験を重ねれば自然な声かけができるのでは」との声も。

宮澤医師は、「認知症は大きな課題ですが、それを入口に、何かあった時に声をかけあい、駆け込める場所があるまちになければならぬ。顔の見える関係ができてきて、『困った時は汐田病院に相談してみよう』と覚えてもらえるようになってきた」と言います。仕掛けの一人である松尾さんは「エリア会議」の役割を強調。「以前は病院と各施設の一対一の関係でしたが、最近は施設同士の横のつながりもでき、日常的に情報交換したり、事例検討をしたり、互いに補い合っている。利用者やボランティアの役割も出てきた。地域の支援者同士の信頼関係が強化され、支援の力も強まる。そこに住民も入り、貧困や若い世代の問題にも目を向けていけるまちをめざしたい」。